

日本で永住するための漢字学習支援 - 暮らしの文字・子育ての文字の習得を目指して

文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」プログラムC

西6 掛橋智佳子(生活の漢字をかんがえる会)

<活動の課題・背景>

日本で生活を行っていく上で識字は社会参加に不可欠であるが、成人になってからの文字学習には困難が伴う。しかし、生活言語を基本とした基礎レベルの文字教育を行う公的な教室がないのが現状である。事業は文字学習の困難を軽減し、漢字を学びやすくすることで、日本で生活する外国人の社会参加を促し永住を支援することを目的としている。これまで活動は、競争的資金による単年度事業であるため、安定的・継続的に実施できるしくみづくりが課題となっている。

<活動内容・報告>

1. 漢字学習支援(漢字教室の開催)

①「生活の漢字教室」

形式:対面教室形式 保育付 週1回2時間×30回

参加:在住外国人(成人 定員14人・平均10人参加)

+元学習者の外国人スタッフ2人・日本語教師 2~4人

振り返り コロナによる参加控え、帰国等参加数が不安定だった中で、会話には問題がないが文字学習の必要性を感じている8~10人は継続参加。文字に特化した取組の意義を確認した。文化庁サイト「つながるひろがるにほんごでの暮らし」とのリンク、年賀状、書道など日本文化体験なども好評であった。コロナ感染が拡大する中で、不安のシェアや相談に外国人スタッフが対応、大きな役割を果たした。

②漢字教室「子育ての文字」-子育てに役立つ「生活の漢字教室」

形式:オンライン形式・週1回1時間×4回 (9月・1月 実施)

参加:子育て中の保護者(定員10人・平均4人参加)+元学習者の外国人スタッフ1人・日本語教師 2人

振り返り オンラインでの初めての実施で試行錯誤の年となったが、継続に向けて一定のノウハウが蓄積できた。参加者の満足度は高いが、定員充足率は低く広報やニーズ調査の必要がある。次年度も継続予定であり、基本的な文字学習についての動画配信などを次のステップとして検討中。

3. 「暮らしの文字」「子育ての文字」に関するスマホ用教材作成

上記1のような学習支援場面で使用できる学習教材をスマホで閲覧できる形で作成・携帯し自律して学んだり、地域の日本語学習教室で気軽に使用したりしてもらえるようにした。

※文化庁教材配布サイト「NEWS」に掲載予定

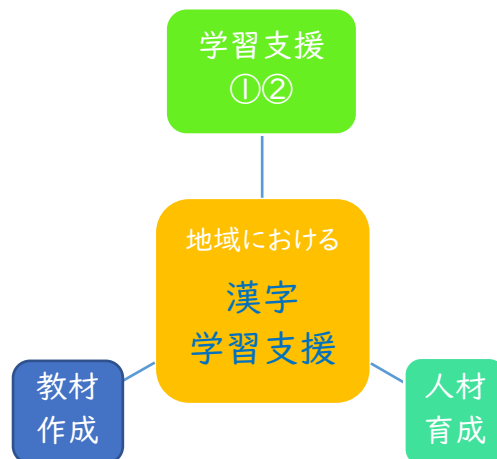
振り返り 文化庁事業では、配布プリントの印刷は認められず教材は学習者の自己負担となったこと、コロナ禍の安全性確保の観点、リンクをはることで様々な情報に飛べること、外国人学習者はスマホを使いこなしている人が多いことなど、スマホ教材に切り替えたことは効果があったと感じている。今後、NEWS などからどのぐらい利用されているのかを分析していきたい。

4. コーディネーターのための「地域における漢字学習支援」研修 (※以下コーディネーター研修)

形式:オンライン講座 8月29日~11月13日 2時間×全5回 隔週・10月は漢字教室見学

参加:地域でコーディネーターの役割を担っている人 12~28人参加 + 講師1人・補助者2~4人

振り返り 受講生からのご紹介で地域のボランティア講座(2か所)+ニュースレターの執筆(1か所)につな



がった。また子育ての漢字教室の学習者への紹介もいただいた。意識の高いコーディネーターの方とつながることができた。メーリングリストの登録は 10 人。来年度は、その中から、2か所で地域での漢字学習支援と一緒に考え、各地域にあったモデル授業を実施・ボランティアが見学・参加できる発展的な形での出前「漢字教室」の実施を計画中。

5. 事業報告会（2月26日(土)14:00~16:00 実施）現在参加者募集中

形式:オンライン 2時間×1回 対象:どなたでも

文字学習支援の意義を知ってもらい、取り組みについてシェア・意見交換をする機会としたい

<コーディネーターとしての振り返り>

● 実践を通して「行ったこと」と「考えたこと」の変遷

昨年~今年度は、集まる機会が少なく、オンラインでの会議が多かった。さらにまた私自身が今年からコーディネーターとしての初年度であり、メンバーとのコミュニケーションの難しさを感じた。年度初めは、全てについて一旦把握・理解してから、各メンバーへの周知・指示を心がけたが、活動が進むにつれて、各活動はそれぞれのリーダーに丸投げし、コーディネーターとして俯瞰して活動を見守るようにした。そのことで、特に比較的参加歴の浅いグループメンバーが自主的に活動に参加、新たなアイデアやうまれたり、活動が活発化したりした。さらに、今年度は複数の外国人スタッフが参加したことで、より細かな学習者への配慮と小さな声の拾い上げにつながった。これらの経験から、メンバーの一人一人がのびのびとそれぞれの力や得意な部分を活かして参加できる場を提供することが、コーディネーターとして大切だという気付きを得た。

● 地域日本語教育コーディネーターとしての役割と課題への取組

地域の関係機関で実施された講座等を受講、日本語教室・国際交流協会へのボランティア参加などで現場の声に耳を傾けた。本事業の実施にあたって、問題があれば外部運営委員の方にアドバイスをいただき、事業推進に大きな力となった。しかし、コロナ禍で思うように動けていないのが悔やまれる。特に大阪市教育委員会との連携は未だうまく機能していない。

活動の課題として挙げた「活動継続のしくみづくり」としては、次年度への事業継続のためには、引き続き文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」(プログラム C)への申請準備を行っている。その際、中間報告でいただいた「仕組みというのが、具体的にどのような要素(習得内容・方法、指導者、教材等)から構成されるものか」ということを検討し、アウトリーチを来年度事業に組み込んだ。

①地域住民(日本人・外国人)に活動の重要性の理解の推進

広報ツールとしてリーフレットの作成、それを地域に配布・設置を促すことで、「文字学習支援」の活動の理解を促すとともに、持参して現場の声を聴いたり、ネットワークを広げたりする。

②「漢字学習支援」のための人材育成

現在私たちが支援を実施している地域以外でも支援ができるよう、その地域の人と「どのような形なら取り組めるのか」を一緒に考え、モデル授業を実施、見学の機会を作る。

文化庁事業は3年度が上限のため、長くてもあと2年しか助成が受けられない。①②により、次の実施形態への移行の足掛かりにしたいと考える。

● 実践において、難しいと感じたこと、今後に向けて知りたいこと

地域日本語教育において、有償の日本語教育専門家の役割・無償のボランティアの役割については、まだ理解が浸透しているとは言い難い。連携や分担がうまく機能している事例や、そこまでの過程を知りたい。